

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】

岡崎 享子

【所属】（助成決定時）

立命館大学

【研究題目】

金時鐘の言語世界－尹東柱との関係を中心に－

【研究の目的】（400字程度）

申請者は、金時鐘による日本語の脱植民地化とはどのような背景、過程をもって行われたのかということに焦点を当て、現在に至るまで金時鐘の言語観とアイデンティティの関係性について考察してきた。本研究では、金時鐘（1929～）の言語観が形成される際に、重要な役割を果たしていると考えられる朝鮮語との関連について明らかにすることを目的としている。金時鐘に関する研究は従来、2000年以前の作品を対象とした彼が持つ日本語の特異性、即ち「在日朝鮮人語としての日本語」について論じられたものが多い。しかし、金時鐘は1949年6月に渡日するに至るまで幼少期、青年期を朝鮮半島で過ごした。金時鐘は、植民地朝鮮で皇国少年として育ち、日本語に慣れ親しんだと言及すると同時に、済州島の朝鮮語の方言も話せるとも言及している。したがって、本研究では、2000以降における金時鐘の朝鮮語から日本語への翻訳詩と創作詩を対象にし、それらの作品分析を通して朝鮮語と日本語の関係性について考察する。

【研究の内容・方法】（800字程度）

金時鐘は2004年に植民地朝鮮の詩人である尹東柱（1917～1945）によって書かれた朝鮮語の詩集を日本語訳した詩集を発表した。本研究では、2000年以降の金時鐘の尹東柱の詩集の翻訳作業が彼の言語観と詩の創作姿勢にも大きな影響を与えたと考え、金時鐘と尹東柱の関係について明らかにすることも目的とした。研究方法については、二つの研究方法を用いて調査した。一つめは、文献調査である。文献調査では、金時鐘と尹東柱の作品を比較分析する。二つ目は、現地調査である。現地調査は、大きく二つに分けられる。一つ目は、尹東柱について理解を深めるための調査であり、二つ目は、金時鐘と実際にお会いし、共に済州島や対馬に同行することによって、金時鐘本人の話を聞き、観察することを目的とした調査である。

① 文献調査

金時鐘が2004年に発表した、植民地朝鮮の詩人である尹東柱（1917～1945）の詩集である『空と風と星と詩』の日本語訳を朝鮮語の原文と考察することにより、彼の朝鮮語と日本語の言語観について考察した。さらに、尹東柱の翻訳詩集が発表された後の2010年には、金時鐘の第7詩集『失くした季節』が発表された。本研究では、『空と風と星と詩』と『失くした季節』を比較分析し、金時鐘の創作詩に与えたと思われる影響関係についても考察した。

② 現地調査

本研究では、四つの現地調査を行った。まず、尹東柱について深く理解するため、(1)彼が植民地朝鮮に日本留学をしていた立教大学（東京）、同志社大学（京都）や、下宿先（東京）を訪問した。さらに、(2)韓国ソウルにある「尹東柱文学館」、「韓国現代文学館」、「ソウル歴史博物館」、延世大学内にある「尹東柱記念館」、「尹東柱詩碑」を訪問した。

次に、申請者は、金時鐘と直接会うことができ、交流を深めることができた。その結果、(3)金時鐘が済州島を訪れる際に、同行することができた。さらに、(4)金時鐘が対馬で開催された「済州四・三事件予備検束犠牲者 対馬・済州慰霊祭」に参加する際、同行した。

【結論・考察】（４００字程度）

① 文献調査

『失くした季節』の作品の中には、尹東柱の作品に表現されている朝鮮語やその翻訳語から影響を与えたと思われる作品が見受けられた。金時鐘にとって、尹東柱の翻訳作業は朝鮮語との出会い直しの機会であり、朝鮮語を日本語に移す作業を通して新たな彼独自の日本語を創ることを可能とさせたと考えられる。即ち、朝鮮語が「在日朝鮮語としての日本語」という言語観を創り上げる際の材料となり得たという結論に至った。

② 現地調査

尹東柱についての調査を行い、作品の背景や内容と直接関係する彼の生活を体感することができ、作品分析をする際に有益な資料となった。また、金時鐘と済州島に行くことができ、金時鐘自身が彼の過ごした町、小学校等を案内してもらえる機会を得、様々なお話を直接聞くことができた。済州島と対馬に同行する間に聞いた幼少期の体験は、彼の言語やアイデンティティの土台となっていることから、貴重な資料となった。渡日後に彼が提唱する「在日朝鮮人語としての日本語」の形成過程の土台には、済州島で自然に習得した朝鮮語があると考えられる。